

09-37

地域連携病院からの精神科疾患を有する形成外科紹介患者の傾向と対策

横浜市立みなと赤十字病院 形成外科

○石井 義剛¹⁾、矢野 智之²⁾、伊藤 理³⁾

【目的】当院には年間約12000台の救急車が搬送されると共に、地域中核病院として多くの紹介患者を受け入れている。また精神科救急身体合併症転院事業を行っており、精神科疾患を有する患者を積極的に受け入れている。精神科疾患をベースとした身体合併症としての形成外科疾患は特長的な病態を持つ為に、その傾向と対策を報告する。

【方法】当院開院時2005年4月から2013年5月までの地域連携室を通した紹介患者138例の内、精神科疾患を有する27例(19.6%)を対象とした。自傷・他害を含む受傷機転、受傷部位、受傷疾患の種類、精神科疾患名、他基礎疾患、入院形態・期間、治療時期、治療内容、治療後の経過などに関して後ろ向きに調査した。

【結果】27例の内訳は男23例、女4例、年齢37～87歳(平均58.3歳)であった。最多疾患の褥瘡7例中1例は過剰内服による意識障害が原因であった。続く潰瘍・壊疽6例中1例は熱傷後の潰瘍・壊疽であった。また、自傷行為による受傷は先の2例に加え、刃物などによる軟部組織損傷2例、顔面の壁殴打による左眼窩底骨折1例、計5例であった。内、退院後も同様に自傷行為で受診した症例は1例、パニック障害・適応障害の患者であった。27例中、代表的な精神疾患は統合失調症8例、アルコール精神障害7例、認知症4例であった。27例中19例が他基礎疾患を有し、内11例が糖尿病などの生活習慣病を有していた。入院12例の内、外来定期followを行ったのは6例であり、自己中断した2例はアルコール精神障害患者であった。

【考察】精神科疾患を有する患者は内服薬により臥床が続くことが多く、外来通院や治療に関するコンプライアンスが維持しにくいことから、褥瘡や潰瘍・壊疽など難治性疾患が多い傾向が見られた。予防しうる疾患も多いことから、一層の精神科病院への啓蒙の必要性が示唆された。

09-38

メディカルメイク患者からの今後の要望

前橋赤十字病院 医局診療秘書室¹⁾、看護部²⁾、形成・美容外科³⁾

○平井 佳子^{1,2,3)}、野上 美由紀²⁾、池田 里香²⁾、村松 英之³⁾、徳中 亮平³⁾、梅澤 和也³⁾

【目的】当院は、高度救命救急センターを有する総合病院であり、様々な疾患の治療に当たっている。2010年4月9日に形成外科的治療の一つとして、形成・美容外科にカウンセリングと一体化したメディカルメイク外来を開設した。これまでの約4年間の治療経験と、患者からの今後の要望について検討したため、若干の文献的考察を加えて報告する。

【方法】2012年4月1日～2014年3月31日に施術した患者に対し、メディカルメイク外来に対する今後の要望を、アンケート調査を用いて評価を行った。また、施術内容の変化についても考察を行った。

【結果】メディカルメイクを受けたことでの満足度の他に、患者がこれからメイク以外にも何を求めているのかが分かった。その中で、当院で出来るものと出来ないものを判別し、今後の治療に役立てて行きたい。

【考察】メディカルメイクは患者のためのメイクであるため、患者の意見に基づいた施術を行うことが出来れば、医療の質を上げることが出来ると思われた。

09-39

当科において末梢挿入中心静脈カテーテル(PICC)を使用した5例の経験

長岡赤十字病院 小児外科¹⁾、小児外科外来²⁾

○金田 聡¹⁾、広田 雅行¹⁾、小川 晶子²⁾

【はじめに】最近、当科では中心静脈ルートを確認したい時に、鎖骨下アプローチでなく、挿入に安全性が高いとされる末梢挿入中心静脈カテーテル(PICC)を選択している。この約2年間で5例に施行したことで報告する。カテーテルは、Seldinger法で挿入するアーガイル社製PICC KITと逆流防止弁が特徴のメディコン社製グローションカテーテルがあるが、当科では挿入手技の容易なアーガイル社製を主に使用している。

【症例】(1)12歳女児。膿瘍形成性虫垂炎・術後遺残膿瘍などで3回の手術となった。術後、長期の禁食期間が予想され、術後に手術室で挿入。更に高度の下痢のため管理が長期にわたることになり、3回の挿入を行った。(2)11歳男児。膿瘍形成性虫垂炎術後。麻痺性イレウスの可能性、ライン確保困難のため、術後に挿入。(3)13歳女児。巨大な膿瘍形成性虫垂炎。interval手術の方針としたが、待機中に高Amy血症を併発し、栄養・薬剤投与を目的にPICCを挿入した。無麻酔、透視下で挿入。(4)14歳女児。神経性食思不振症。症状悪化に伴う栄養管理のため、鎮静下、透視下で挿入。(5)16歳男性(初回)。腸軸捻転で短腸症候群となり、在宅静脈栄養管理中。術後よりPICCが挿入され、その後も6回の入れ替えを行い、約2年間PICCでの在宅静脈栄養管理を継続している。この症例は、今後懸念されるアクセスルートの枯渇の可能性を考慮し、できるかぎり大血管を温存するためPICCで引っ張りたいと考えている。

【まとめ】PICCは、“ちょっとCVルートが欲しい”時などに、比較的簡便に、かつ安全に行える手技として、小児外科領域においても有用と考えられた。また、在宅静脈栄養管理でも、この2年5ヶ月は大きなトラブルなくPICCで管理ができており、“しっかりとしたCVルートの確保”にも有用と思われた。

09-40

小児外科における日帰り手術とその問題点

長野赤十字病院 小児外科¹⁾、信州大学 保健学科²⁾

○北原 修一郎¹⁾、寺田 克²⁾

【背景と目的】当院は2012年4月診療報酬改定でDPC3群病院となった。DPC2群病院を目指して外保連指数の増加をはかる為、小手術を外来へ移行することになった。1999年から約3年間施行していた日帰り外来手術(以下DSと略す)を再開した。その経緯と問題点を検討する。【経過】10年間の変化は、2008年小児センター開設(小児科と小児外科外来の統合)、麻酔外来増設(2012年手術室改修)により術前麻酔科診察が外来で容易になった。しかし、日帰り手術センターがなく、術後管理をする場所の検討が必要になった。

【方法】対象疾患をヘルニアなど体表疾患に限定し、腹腔鏡下ヘルニア根治術には適応しないことにした。術前麻酔科診察は、前日に外来で行うことにし、術後回復室は、小児科専用病棟の一区画を利用することにして、2013年4月再開した。

【結果】手術前日術前検査に来院、麻酔科診察と手術室の看護師による説明、小児外科外来へ戻り、インフォームドコンセントと看護師の説明を行った。手術日は、小児センター外来に8時20分来院、手術室9時入室手術(局所麻酔併用)、術後小児病棟とした。回復確認後帰宅、必要時入院とした。前回と今回を比較すると(前回)、症例数79例(74)、男61例女18例(男44女30)、平均年齢3.7歳:10ヶ月～13歳(4.8:8ヶ月～11歳)、疾患はヘルニアが48例:男39女9:片側47、両側1(61:男34女27:片側58、両側3)、停留精巣12例(2)、臍ヘルニア18例(1)。術後入院症例は2例(0例)。

【考察と結論】DSは、患者家族にとっては、入院しないで済むことにより、支払う医療費が抑えられ、また入院による付添をしないので済むため、同胞や祖父母世代に負担をかけないで済む。日帰り手術センターは、外来看護師を増員できず、開設できない。小児外科では、DSを採用すると、病院収入の減少が大きい。外保連指数の増加は、わずかであった。

一般演題
10月17日(金)
(口演)